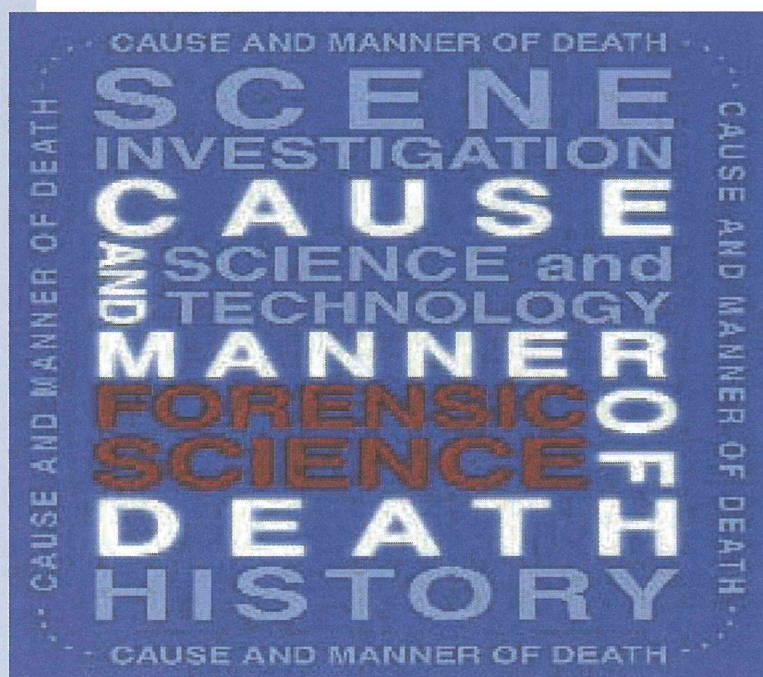


chapter 3

第三章



Thomas Streed, Ph.D.
Suzanne Bronheim, Ph.D.
Donald Mauro, M.S.

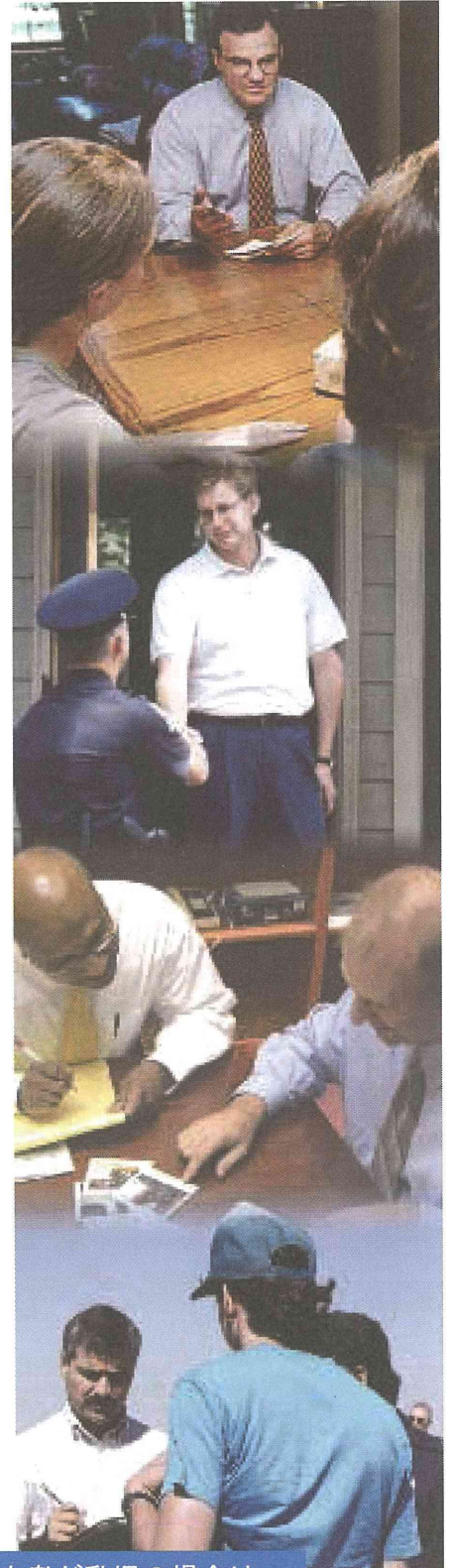
面接の心理学

基本的な面接のコンセプト

ユニット 6: 面接における注意点

ユニット 7: 内容や行動の分析

ユニット 8: 調査のための面接



死亡現場調査におけるストレスや不安は、死亡者が乳児の場合は増大する。多くの目撃者、多くの機関、現場、養育者らによって混乱した状況が生じる。本章では、目撃者へ面接する際の心理学的な考察事項を述べるとともに、面接と尋問の大きな違いについても述べる。この二つは、情報収集方法として全く異なるものである。

概要

本章では、両親およびその他の目撃者に調査目的の面接を行う際の、基本的に行うべき事項を中心に述べる。この中には、乳児を最後にその場に置いたとされる人物（プレイサー）、最後に乳児が生存していたことを確認したとされる人物（LKA）、および乳児が死亡しているか、無反応のところを発見したとされる人物（ファインダー）と、調査員との間の全てのやり取りが含まれる。さらに、データ収集方法とその器材についても言及している。

補助資料

次のような補助資料が推奨される

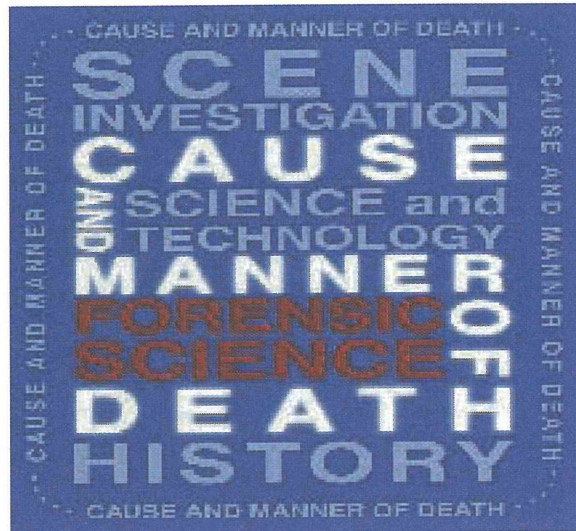
1. Ekman P. *Emotion in the Human Face*. Oxford: Oxford University Press; 2005.
2. Fleisher WL, Gordon NJ. *Effective Interviewing and Interrogation Techniques*. San Diego: Academic Press; 2002.
3. Wilson C, Powell M. *A Guide to Interviewing Children*. New York: Routledge Press; 2001.
4. Schafer JR, Navarro J. *Advanced Interviewing Techniques: Proven Strategies for Law Enforcement, Military and Security Personnel*. Springfield, Ill: Charles C. Thomas; 2004.
5. Rabon D. *Interviewing and Interrogation*. Durham, NC: Carolina Academic Press; 1992.
6. Esposito, L. SIDS Center of New Jersey (various educational materials developed). 2005.
7. Bronheim S. *Infusing Cultural and Linguistic Competence into the Multiple Systems Encountered by Families Following the Sudden, Unexpected Death of an Infant*. Washington, DC: National Center for Cultural Competence; 2003.
8. Registry of Interpreters for the Deaf. (703) 838-0030 Voice, (703) 838-0459 TTY. <http://www.rid.org>.

本章のねらい

本章の終わりまでに、読者は以下の能力が身につけられるようになる

1. 面接と尋問とを区別することができる。
2. 文化の違いが面接にどのように影響するかを説明できる。
3. 内容や行動について分析できる。
4. 面接の計画を立案できる。
5. 面接を行うことができる。

どの作業も、プロフェッショナルリズムに基づき、慎重なやり方で法、条例、習慣に従って行わなければならない。



6 — 面接における注意点

はじめに

既に強調したように、予期せぬ乳児の突然死は家族にとって悲劇的な出来事である。このような悲しみを味わった家族や養育者には、その悲嘆に細やかに配慮した調査がふさわしく、そして面接を受ける際にはそのような配慮を尽くしてもらう権利がある。非難的なものや、彼らの抱く感情に鈍感な調査は、適切ではない。

調査委員に最も役立つ資質は、好奇心と真実を知りたいという欲求である。訓練のこの部分では、面接の手法、ならびに必要なデータを入手するためにはどのような相互関係を築くべきか、そして入手した情報の質の評価方法について取り扱う。文化という問題は、どのように他人と関わり、どのようにその行動を評価するかを決定する際の重要な要素である。文化がどのように面接方法に作用するかを理解することは、そのやり方と入手情報について納得のいく適切な結論を下すために、非常に重要である。

面接と尋問

面接と尋問という用語は、置き換えのきかないものである。定期的に、尋問という概念には、個人への質問の仕方として理不尽で不適切な、いわゆる第3級犯罪またはその他の虐待的行為の影がつきまとうという懸念が寄せられるものである。この、まったく別々の手法は、面接者と調査員の間文化的な違いが認識される場合に、特別な関連性を持つことがある。面接とは、一般的には不正確な情報を提供する意図や動機もない人物から情報を収集するものである。面接とは、特定の目的を念頭においた、計画的な会話である。一方、尋問の目的は、その人物が調査中の事柄について責任があるか、関与しているかを認定するため、その個人から情報を入手することである。面接と違い、これは嘘を述べることで利益を得る可能性のある個人から情報を引き出すためにコントロールされる会話である。

異文化間の配慮

文化とは、思想、情報伝達、言語、信念、価値、慣習、習慣、祭祀、交流方法、役割、関係性、および人種、民族、信仰、霊的信仰、社会性、または政治的グループ等において予期される行動を含む、人間集団の行動様式の総体であり、次世代にその様式を伝える力を持ったものであり、そしてそれが力動的にごく自然に行われるものである(Cross, Bazron, Dennis, & Isaacs, 1989)。個人や集団の多様性を反映した文化的要素の影響力は、人種や民族性をはるかに上回る。その要素には、言語、国家の起源、部族または族間の関係、性別、年齢、教育、識字率、社会経済的ステータスや地位、性的指向や性的アイデンティティ、宗教または霊的信仰、地理的または地域的様式、法的立場、文化変容および同一化を含むが、もちろんこれらの他にも多くの事柄が含まれる。例えば、十代の母親を面接する中年男性は、潜在的な異文化間コミュニケーションに関わっていることになる。異文化的状況で上手に面接を行う面接官になるには、お互いの文化的信念、価値観、行動、および前提と、異文化の人々のそれらに関する注意と知識を必要とする。この注意を怠ると、面接官は他人の行動やかかわり方を、その意味において不正な前提のレンズを通して見ることになり、面接の進行にバイアスをかけ、それが不正確な情報や結論につながるリスクをおかすことになる。さらに、他人の習慣や慣習を無視する面接官は、深刻な文化的無作法を働くことになり、良い面接に必要な信頼感を著しく損ねかねない。異文化に関する知識不足による無神経で侮辱的なふるまいは、面接の進行を損ねる場合がある。

自分自身の文化的レンズをどう理解するか

自分自身の文化的信念、価値観、そして風習は、非常に自動的で自然—“それはそういうものだ”—であるため、認識するのが難しいことが多い。通常、人は別の文化に出会って初めて自分の文化を意識する。したがって、他文化集団を経験する機会を作ることが、良い面接官になるための一課程になる。良い面接官は、自身の信念、価値観、および慣習についても時間をかけて検討する。以下の質問は、(全てを網羅したものではないが)面接に作用する可能性のある自分自身の文化的事柄について確認する一助になるかもしれない。

自分は以下の事柄についてどう思っているか...

1. 人は悲しい出来事があった時、どのように行動すべきであるか？
2. 自分の宗教および文化的観点から見た死とはどのようなものであるか？
3. 適切な家庭像とはどういうものか(既婚/未婚の親などをどう思うか)？
4. 良い育児とはどういうものか？
5. 秩序だった家とはどのような家か？
6. 見知らぬ人、権威のある人、または異性に対して、どのように対応すべきか？
7. 自分とは社会経済的立場が異なる人(より豊かな人物や貧しい人物など)に対して、どのように対応すべきか？
8. 真実を述べる時、人はどのように行動すると考えているか？
9. 家庭における男性、女性、および子どもの役割とは何か？
10. 年齢が異なる人(年上、子ども、十代など)に対して、どのように対応すべきか？
11. 母国語の異なる人物へは、どのように対応すべきか？

異文化の学び方

担当地域に住む集団の文化的信条、価値観、および慣習について知ること、面接の準備の一部である。最も有効な戦略は、様々なコミュニティの個人や組織について確認し、知識を身につけておくことである。特定の集団との業務に関する異文化間問題について、生の情報を伝えてくれる文化の仲介者と関係を築くことも役に立つ。

文化の仲介とは、衝突を軽減するため、または変化をもたらすために、異なる文化背景を持つ集団や個人間の橋渡し、連絡、または仲立ちをする行為である (Jezewski, 1990)。

文化の仲介者は、自分自身の文化や、死亡現場調査にまつわる文化やシステムをよく認識していなければならない。その人物は、面接者が、面接実行に影響を与える信条、価値観、慣習、および習慣について学ぶことを助けることができる。文化仲介者は面接者が、目撃者や主要な情報提供者との信頼感を損ねたり協力体勢を損ねるような、文化的な問題の失敗をしないように助けることができる。

技量に長けた面接者は、面接を気持ちよく受けてくれるか進んで協力するかにも影響しかねない、地域内の他の文化集団の健康に関する慣習、死者の取り扱い方（解剖、死体に触れても良い者など）に関する宗教的信仰、および健康、子どもの福祉、および警察機関に関する偏見や差別の歴史についても学んでいるものである。

面接に入る前に、自分自身の面接をうける者に対する文化的先入観についてや、異文化間の問題に関し、あらかじめ確認することができるようにならなければならない。その際には相互交流の方法やふるまい方についても評価しておく必要がある。これは、不適切な異文化間解釈が入り込むことを避けながら、面接の交流から得た重要な情報を利用しつつ報告の結論を伝え、入手した情報を評価するという、慎重さを要する一連の流れのである。死亡現場調査員が所属する組織は、調査員へ情報や異文化学習の機会を提供し、そしてそれを組織の構造および実務の一環とするべきである。

就学前の子どもの面接（5歳まで）

幼い子どもは、関連性のある情報と関連性のない情報を見分けることが難しい場合があるため、出来事についての説明はとりとめがなく、ばらばらになる傾向がある。注意力が持続する時間が短く、一度に一つのことにしか集中できない。考えを一つのまとまりに統合することが難しい。情報や出来事を思い出す能力は、短期、長期、感覚的なものがあるが、いずれも未発達である。

非常に幼い子どもは知覚も未発達で、それが聞いたことなのか、見たことなのか、または他人（親、きょうだい、大人など）が言ったことなのかが区別できず、それが問題になることも多い。現実と空想を区別することが難しいこともある。調査官は、幼い子どもでも嘘をつくことができるということも理解しておかななければならない。しかし、嘘を裏づけることは、一般的にはできないものである。

学童期の子どもの面接（5歳から17歳）

子どもの年齢が進むにつれて、語彙も増えて言語能力が向上するが、これは同年代の集団、親、および子どもが交流するその他の子どもや青少年から受ける影響が強い。

幼い子どもが抽象的な概念というものを使えるようになっていく発達過程は、年齢とともに進む；しかし、この概念は単純で表面的な傾向がある。彼らの、考えや出来事を思い出す能力は、成長につれて向上するが、性別に基づいた基準と合致する傾向がある。

大人からの“分離”を図り“アイデンティティ”を確立していくために、虚偽の報告がなされることがよくある。この年頃の子どもは、“道徳的”か“不道徳的”か、または“正義”か“不正”か、ではなく、“正しい”か“間違っている”か、と言う概念に合わせる傾向がある。

死別と悲嘆についてより詳しく考察する

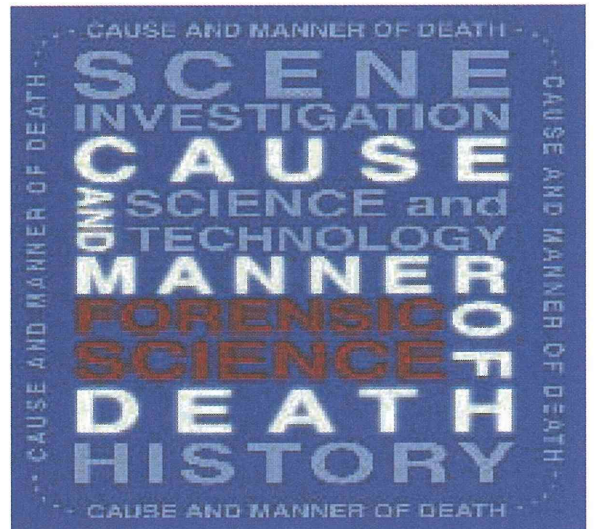
子どもを亡くした時、両親を包む悲しみの特徴は、計り知れない喪失感、悲哀、そして失敗感である。両親は、何らかの形で自分が子どもを死から守ることに失敗したとみることが多い。調査員は、調査手続きの際、まず亡くなった乳児の両親のカウンセリングという繊細な作業から開始することが重要である。乳児の死が、両親にとって初めての死の経験である場合もある。それがいつまでも両親の罪悪感を引き出し、些細な不備が大きなことに感じられ、怒りを増大させ、家族の機能に多大な影響を与えることもある。この赤ん坊への望み、計画、そして夢はすべて打ち砕かれたという感覚とともに。(McClain & Mandell, 1994)。死は究極の別れであるため、両親はもう一人子どもを産もうが、亡くなった子の前後に生まれた子どもがいようと、その子どもを失った空虚感を埋めることが出来ない。熟練したカウンセリングは、両親がうまく悲嘆と折り合いをつけていく上で、計り知れない効果をもたらす。この介入は、両親自身にも多くの利益があるほか、その家族やコミュニティにとっても、現在、将来を通じて利益がある。悲嘆そのものと同じく、カウンセリングにも多くの段階があり、時間をかけて行わなければならない。医療専門職は、前もって以下の段階を参考に準備を行っておくことが望まれる。

子どもと死別した親へのカウンセリング：基本スキル

1. 赤ん坊の生と死の話に耳を傾け寄り添う；両親の文化的背景の中で、彼らの悲嘆の表現に注意を向ける。
2. 同情の気持ちを伝える。
3. 死因、家族の成り立ち、家族の異動についての知識を得ておく。
4. 以下の分析をする：
 - a) 自殺念慮や、そのリスクを含む家族構成員の悲嘆への反応。
 - b) ソーシャルサポート・ネットワークの利用可否および適格性。
 - c) 死因についての家族の知識と理解。
5. 悲嘆のプロセスについて前もって情報を提供し、どのように悲しみを表現し、今後数日または数週間にどのようなことが予想されるかを説明する。
6. グリーフセラピー（コミュニティーの保健所、ソーシャルサービス・プログラムなど）への適切な照会。

死亡状況によっては、両親は医療専門職、警察捜査員、監察医、検視官と接触する場合もある。彼らの反応は死亡状況の如何や、関係専門職の繊細さやおしつけがましさを如何によって変化する(Longchamp, Hall, & Arnold, 2003)。従って、現場で最初に出会う専門職である調査員が、調査時の会話や行動を通じて、両親に居心地の悪さを感じさせずに、プライバシー尊重の感覚を与えることは重要である。

McClain M, Arnold J, Longchamp E, Shaefer J. Bereavement Counseling for Sudden Infant Death Syndrome (SIDS) and Infant Mortality: Core Competencies for the Health Care Professional. McLean, V: Association of SIDS and Infant Mortality Programs; 2004: 13-18. より引用



7 unit

面接者と交わした会話の内容・ 面接時に認められた行動につき 評価する

はじめに

言葉によるコミュニケーションというものは、小児期に学習し始める言語の、解釈や基本構造というものが基礎となっている。この構造は小児期の間に強く刷り込まれるものであるが、絶えず変化する状態にあるものでもある。このような変化の例としては、ティーンズから青年期にかけての時期に、構文および単語の著明な変化が見られる（いわゆる若者ことば）。成人においてさえ認めることもあるこの口話の変化というものは、我々が他者の発したメッセージにどのように反応するか、そして我々が他者へ送ったメッセージにその人たちがどのように反応するかということの再解釈の結果、生じるものである。目撃者に面接する調査員は必ず、交わされた会話内容や、認められた行動をどのように評価するのか、ということに関しての基本概念を理解しておかなければならない。

会話内容および面接の際の行動を評価するとはどういうことか

わされた会話内容だけではなく、言外の様子というものはしばしば、目撃者の情動状態というものをつまびらかにし、目撃者が選択した言葉よりも多くの意味を伝えることも多い。言外の様子には、(1) 目撃者の口調(声の高低など); (2) 会話の音量; (3) 会話の速度; (4) 中断や沈黙の頻度や長さ; および(5) 非病的な吃音や口ごもりを含む、たどたどしい場面が増加する などが含まれるであろう。

目撃者が会話をする際に強いストレスを感じていたり、場合によっては虚偽の内容を伝えようとする場合、(1) 奇妙な、または通常とは異なる構文(単語の組み合わせ方)を用いたり、(2) 不正確な形で言葉の選択が行われたり、(3) 与えられた質問に対応していない返答をしたり、といったことがみられる場合がある。解釈というものは様々な要素によって影響を受けるものであり、時には調査員が目撃者の見解を誤解釈したり誤って特徴づけた結果、目撃者が調査員を欺こうとしている、と思いつくこともある。身振りはおそらく最も古くからある会話形態である。目撃者は、顔の表情、身体の動き、アイ・コンタクト、手の動き、服装、髪型、パーソナルスペースの距離感、および家具の位置に至るまでの幅広い非言語ジェスチャーをもって、他人にメッセージを伝える場合がある。

非言語的な行動は、正直さ、信頼度、誠実さを計る上で重要なメカニズムである。我々はジェスチャーよりも言語を選択するように教えられるが、研究によれば、我々は言語メッセージよりも非言語メッセージの解釈をより信頼していることが示されている。対面会話による情報の大部分は、顔のジェスチャーから得られている。

会話内容(言外の様子)の評価

面接者が強いストレスを感じていることを示唆する言外の様子

- 口調
- 声の大きさ
- 会話の速度
- 中断と沈黙
- たどたどしくなる

思い込みの要素

調査員は、目撃者の情報の正確性への信頼を損ねてしまいうる要素に常に注意を払うべきである。これらの要素の中には、目撃者の (1) 情報選択の限定性; (2) 予期; (3) 偏見、先入観、および調査員側のニーズ; (4) 心理的ストレス; (5) 生理的苦痛; (6) 環境的要件; および (7) 人間の記憶力の限界、などがある。

目撃者の情報選択の限定性: 人間が一度に見ることのできるデータ量は限られている。調査員は、乳児死亡の発生時、その死にほとんど、または全く無関係な出来事について、目撃者に説明を求める必要性があるが、うまく説明が得られないということはよくある。

目撃者の予期: 目撃者は、乳児の様子、匂い、感触がどのようであったかを説明することができるが、あらかじめ入手していた情報と、出来事と関連させて考えてしまうかもしれない。

偏見と先入観: これらは、他者の行動をこうであろうと思い込んでしまう、という問題で、多面的な要素が含まれるものである。目撃者の“みんな同じように見える”という主張は、問題となっている集団にしか関わっていない場合に限って言えば、実際に根拠があるかもしれないのである。目撃者の中には、社会的なイメージで身体的特徴(唇の厚さ、目の離れ方、鼻の広さ、身長、体重、髪の長さや髪型、服装など)を捉えてしまう傾向にある者もいる。特にその集団にありがちな外見・体格をしていた場合、より当てはめて捉え、確信してしまいがちな傾向がある。死亡現場調査員は、調査においては、自分自身の偏見や先入観による見方を自覚しなければならない。常にプロフェッショナリズムを維持すべきである。情報は中立的態度で収集し、乳児の死に関するあらゆる可能性を考慮に入れるようにすべきである。

心理的ストレス：人は自らの感覚を、他人をみる際の認知に投影する傾向がある。最近の研究では、深刻なストレスを経験している人は、よりストレスの少ない状況にいる人よりも、同じ出来事の報告において細部の正確性が劣ることが判明している。

生理的条件：(1) 疲労、(2) 視覚的問題、(3) 聴覚的問題、(4) その他の感覚障害 などがこの条件に含まれる。

疲労：24時間睡眠をとっていない人からの知覚的情報は、注意して評価しなければならない。36時間睡眠をとっていない人からの情報は信用できない。

視覚的問題：解剖学的に網膜が感知した像とそれを解釈する、という間柄は基本的に曖昧なものである。その曖昧さは、世界は三次元であるのに対し網膜は二次元であるところから生じている。

- 像を凝視した後には、残像が残る。
- 像が自然に変わっていったとしても、変わっていないように認識しがちである
- 近視・遠視、夜盲、単眼視力、および色覚異常の結果、視覚的な問題が生じてしまっている場合もある。

聴覚的問題：目撃者の聴覚に問題が生じていた場合、速度・距離・方向というものを把握する能力が影響を受けていた可能性がある。その他には特定音域聴力障害、耳鳴り、加齢性聴力障害などがあつた場合にも影響を受ける。

その他の感覚における問題：この障害には、(1) 4つの基本的味覚刺激（甘味、塩味、酸味、苦味）をふくむ味覚；(2) 6つの原臭（芳香、エーテル臭、刺激臭、腐敗臭、樹脂臭、および焦臭）をふくむ臭覚、および(3) 圧覚、痛覚、冷覚、温覚をふくむ触覚が含まれる。

環境条件：環境上の、(1) 出来事を目撃した時間；(2) 照明条件；および(3) その他の気を散らすような条件 といったものによる思い込みが生じる場合もある。

観察期間：その出来事を目撃した時間は、直接的にその認知の正確性につながる。

照明条件：目の網膜を刺激する視覚情報量によって、認知力が限定される場合がある。さらに、周囲の照明は、色覚の正確さにも影響する場合がある。

気を散らすような条件：（出来事が生じた場面の）周囲の騒音によって情報における誤りが生じる場合がある。

非言語行動の評価

目撃者が強度のストレスを感じていたり、虚偽の報告をしている可能性を示す非言語的の手がかり

メッセージを構成しているものは言語ではあるものの、言語から得られる情報はメッセージの7%にすぎない。音声的情報（メッセージの38%）とは、話者の口調（声調の高低など）、話している人の声量や柔らかさ、その人のスピーチの速度、中断や沈黙の頻度や長さ、そしてたどたどしさの頻度を指す。表情から得られる情報はメッセージの55%を占め、(1) アイコンタクトと目の動き、(2) 左右非対称な表情、(3) 口や口唇の動き、そして(4) 鼻で見られる反応などがある。(Mehrabian, 1971)

アイコンタクトと目の動き: ストレスへの反応の中には、過剰な瞬き、凝視、またはアイコンタクトの維持ができない、などが含まれる場合がある。

左右非対称な表情: 左右非対称な表情とは、バランスの取れていない表情のことである。顔の左右片方の表情がもう一方の表情と一致しないというような場合である。これは一方の筋肉がもう一方の筋肉よりも強く緊張しているためで、ストレスを感じている人が感情を偽ろうとする（無関心を装うなど）時、この感情を制御しようとして筋肉を過屈曲してしまう傾向にあるためである。その結果、一方の筋肉が過緊張し、左右非対称な表情になるのである。

口および口唇の動き: ストレスへの反応には、歯軋り（歯を摺り合わせる）、歯を食いしばる、しかめっ面をする、口の内部や唇を咬む、口を固く閉じる、唇を吸う、または物を吸うなどが含まれることがある。

鼻でみられる反応: ストレスへの反応には、小鼻を膨らませる、および鼻に触ったりつまんだりすることが含まれる場合がある。

ストレスへの自律神経の反応

自律神経の反応は、殆どの人が制御が困難または不可能な行動である。これらの反応の例は、瞳孔の拡張やマイクロジェスチャーなどに見られる。

瞳孔の拡張: 研究によって、ストレスを与えられると瞳孔が拡張することがあることがわかっている。瞳孔拡張は、闘争・逃走反応の一部、または汎適応性症候群(Selye, 1956)において認められるものである。しかし、面接・尋問といった場面においては、この現象は、肯定的なストレスにも否定的なストレスにも関連づけられるものである。従って、この反応の意味を解釈することは難しい。

マイクロジェスチャー: Paul Ekman (1985)の研究によると、マイクロジェスチャーとは1/4秒未満しか持続しない無意識の反応で、(1) 苦痛、(2) 恐怖、(3) 怒りを表す信号である。

苦痛: この反応は、恥ずかしさ、侮辱、罪悪感、決まり悪さ、などの感情に連動することがあり、眉の内側だけが上がることによって示されることがある。この動きを意識して再現しようと思っても、再現できるのは全体の15%未満である。

恐怖: この反応は、眉がいったん上がってまとめて下がることで示される。

怒り: この反応は、口唇の赤い端の部分がすぼめられ、きつく締められることによって示される。

非言語行動の解釈における問題

意識的に制御できる身振りおよび行動は、ストレスの指標としては信用できない。身振りにおける使い方や意味は文化によって大きく異なる。例えば、直接的アイコンタクトが誓約や誠実さを意味する文化もあれば、敵意のある威嚇とみなされる文化もある。

共通の文化圏や血縁にある人でも、身振りによるジェスチャーや行動には殆ど一貫性がない場合もある。集団内の文化の差異が、集団間の差異と同様に大きい場合もある。例えば、同じ国の同一のコミュニティで生まれ育った人でも、米国内の異なる場所に住むことによって、完全に異なる身体的ジェスチャーを身につける場合もある。

目撃者証言の正確性を評価する

生存した家族および目撃者の証言を評価することは簡単な仕事ではない。

面接では偽証の基本的な徴候を簡単に見逃したり、緊張、ショック、不信、およびその他の危機に瀕した感情を偽証と誤解することもある。面接では、面接に影響しかねない彼らの反応や先入観を、時間をかけて評価するよう心がける。

親は事実の証言よりも、感情的な言葉でもって、怒りや自己非難の気持ちを表現することがある、ということ認識しておくことは極めて重要である。母親または父親は、“全て自分のせいだ”と言ったり、“わたしが子どもを殺したのだ！”とまで言ったりすることもよくあることを、調査面接員は知っておかなければならない。反応は慎重に評価すべきで、面接員は結論に飛びつかないように気をつけなければならない。罪悪感を抱くことは予想できるものであり、乳児や幼児の死に関わる事件ではよくあることである。これらの発現は記録すべきであるが、面接が進み詳細な分析を行う段階までは、調査員は判断をくだしてしまうことを控えるべきである。

それでも、調査員は偽証が行われた場合は見破れるようであればならない。証言を評価する最良の方法の一つは、Joe Navarro (Schafer & Navarro, 2004) が、Four Domain Model of Detecting Deception (偽証発見の4つの領域モデル) と呼んだ方法を用いることである。このモデルは、単一の非言語表現や言語表現に特定の意味を与えるものではなく、行動の様式や行動の全体的なパターンによって、偽証を発見する課程を単純化したものである。4つのカテゴリーは以下のようなものである：

1. 快適/不快: 面接を行っている際に目撃者が安心と感じる領域 (コンフォートゾーン) というものを評価することは、目撃者の反応というものが真正であるかどうかを判断するうえで重要な過程となる。安心で不快でない状況というのは、姿勢; 缶、机上の小物、家具などの死亡調査員と面接者の間に置かれている障害物; 神経質になっていることを表すピクつき; そわそわした様子や上の空の様子などである (もちろんこれに限定されるものではない)。通訳者を介する場合、事前準備や面接時の報告の一部は、この問題の対処に充てる。
2. 強調: 人は面接を受けている時、様々な行動を取るが、言葉、声調、および発言内容というものに関して、どのような形で強調がなされているかを認識し分析することが重要である。
3. 同調性: 複雑な文化的要因や個人差にもよるのであるが、死亡調査員と目撃者が目と目を合わせているか、またこの両者の関係が面接の流れにどのように影響しているか、ということを確認しておくことは重要である。不快/偽証を示すアイコンタクトや身振りというものと、文化的行動を誤解しないことが重要である。
4. 認識管理: 混乱した状況においても、どの目撃者が嘘をついていそうか、どの目撃者が真実を言っているか、ということ判断することが必要である。認識管理には身振りと言語に特別な注意を払うことが含まれる。このモデルにおいて、4つのカテゴリーのうち2つ以上の領域でうまく評価を行ない得ないということは、稀ではない。しかし、これらのカテゴリーで気になる反応が複数ある場合は、この目撃者に対し、追加的フォローアップを行う必要があるとチェックをしておく必要がある。

目撃者証言の個別構成要素を検討する

死亡調査者は、目撃者のどの発言も当然のものを受け止めてはならない。目撃者が数分前に言ったことをひるがえすことは極めてよくあるが、これは調査者が評価判断を行う上での情報の一つとして、一貫性をもって受け入れるべきである。また調査者は面接を行った時刻を記録しておくべきである。回答は、面接時間の長さによっても、午前、午後、および夕方の自然な気分の移り変わりによっても変容するものである。

得られた発言の中の主要要素はなんであったかということ判断する一方で、目撃者の性格や態度、または目撃者全般についての判断を急がないようにするべきである。これは、調査員に観察能力を発揮するなどと言っているわけではなく、常にその能力を確認せよという意味である。

各要素につき、他の情報源から得られた証言との比較検討を行う

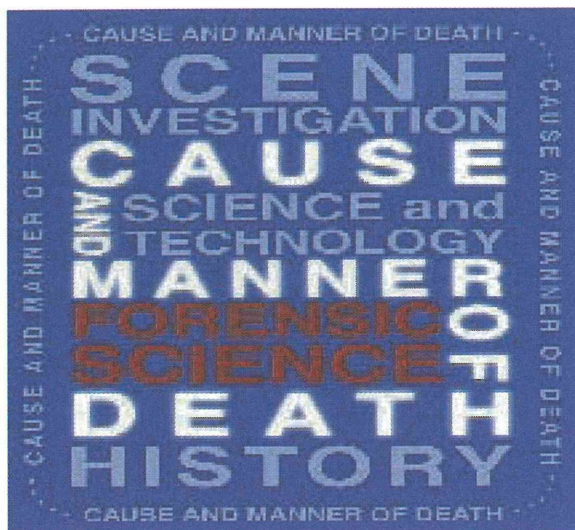
第一目撃者の証言と他の目撃者の証言や他の情報提供者の情報とを、互いに比較することは重要である。複数の目撃者へ面接を行う場合、同様な内容の適切な質問を行い、その回答を比較する。

真実を述べる際のスタイル：養育者の質問への反応、声の調子、話す速度、アイコンタクト、身振り、訥弁、および質問に答える際の中断の頻度や長さというものにはスタイルがある。身振りには文化的差異があり、調査員は対象集団のその差異について熟知しているべきである。調査員がある題材についての身振りの意味に確信が持てない場合は、この疑念を記録しておき、最終報告を行う前に、フォローアップ調査を行うべきである。入国管理状況に関する要素も考慮に入れておく。面接を受ける者は、面接を受けることによって入国管理状況に影響がでるのではないかと懸念する場合も考えられ、従って就業場所、社会保障番号などの情報を隠したいという形で、面接に影響を与えている場合もある。さらに調査員と異なる言語を話す目撃者の場合には、言語的な情報というものを判断することが難しい場合もある。例えば、言葉の意味が音の組み合わせだけでなく、声調の抑揚によっても決定される声調言語（たとえば中国語）では、口話の意味の判断をしにくくなる。口話の手がかりを理解するには、通訳者の専門知識が非常に貴重である。

近接学的距離（距離的な要素）、身振り、および文化的感受性というものを考慮に入れる

近接学的距離と身振りというものは、被面接者を評価したり、彼らにどのように接するかを決定したり、得られた証言を評価する際に役立つ。近接学的距離とは、人が他人と一緒に立つ、あるいは座る際の距離のことであり、親密度を表す距離感であったり、社会的な距離感であったり、公的・私的な距離感であったりというものを表すものである（Schafer & Navarro, 2004, p. 73）。身振りとは、人がどのように自分の姿勢を保つか、または胸の前で手を組む、アイコンタクトをするかしないかなど、取られた身体的状態を指す。

文化的要素を考慮する場合、調査員は偏見を持たないようにすべきである。調査員に目撃者の文化的背景に関する知識がないために、誤解が生じてしまうことはよくある。文化のおよび民族的背景が、近接学的距離や身振りに影響することもあるため、目撃者の関わる文化的背景を知り、文化的または特殊な必要性を評価することが重要である。例えば、ラテン系の女性は、はしたないとされているため直接会ってのコンタクトをしない場合がある。中東の男性は、文化的信念と男女観から、女性と一緒に部屋で面接を受けることを選択しない場合がある。調査員は、面接前に目撃者の近くに立ったり座ったりして、身振りから受ける反応を評価し、様子を推し量るようにすべきである。



8 unit

調査面接

はじめに

死亡調査員は、面接を受ける人から自由な発言が得られるように促し、そして彼/彼女らが出来事に関しての説明を終えた際に疑義があれば、それを明確にするように質問を行う必要がある。面接員は、攻撃的に感じられてしまうことがないような形で積極的に、面接の際に説明を加えたり質問を構築し、面接の主導権を握る必要があり、そのようにすることが求められるのである。養育者が段階を追って、起こった出来事の説明ができるように面接を組み立てることによって、面接で関連情報が得られる可能性が非常に高まる。本章では、調査面接の基本的な3段階について説明する。

導入の段階 (the entry phase) は、被害者、もしくは被害者と目撃者の両者が、損傷を負うことになった事件と、どのようにして関わることとなったかについて、語ってもらう段階である。予期せぬ乳児の突然の死亡 (SUID) においては、プレイサー (乳児を最後に出来事の場においた人物) とファインダー (乳児が死亡しているのを発見した人物) が、各々の行動をするに至った事情 (注: プレイサーであれば乳児が出来事あった場に置くに至った経緯、ファインダーであれば、見つけるに至った経緯)、各々の行動がいつ行われたのか、そしてどこで、なぜこの行動が行われたかを聞く段階にあたる。

出来事につき聞く段階 (the event phase) は、プレイサーとファインダーがそれぞれの行動を取った際、まさに何をしていたかということを知る面接段階であり、これらの行動が正確にいつ、どこで行われたか、またなぜ他の誰でもなくこのプレイサーとファインダーがそのように関わったか、についてのものである。残念ながら殆どの面接員が、面接を行う際にこの段階のみしか聞き取りを終えていないことが多いという段階でもある。

現場から離れた経緯につき聞く段階 (the escape phase) は、目撃者が調査中の事柄から離れよう、現場を去ろう、または逃走しよう、もしくは助けを呼ぼうと決心した時点につき聞く段階である。

面接の計画を立てる

SUID事例の面接を行った経験のない人は、面接はトレーニングを積まずとも当たり前のようにできるものであるととらえがちである。経験豊富な司法医学の死亡現場調査員なら、事前に面接を計画しておくことが成功に貢献することの必要性はよく認識しているであろう。現実的な目標と目的で構成された面接計画をたてておくことは、乳児の死亡現場調査(DSI)に非常に役に立つ。

担当地域の、監察医・検視官関連法規をレビューし、理解しておく

米国には2,285ほどの郡または監察医行政区または検視官管轄区がある。州はたいてい“監察医が主である州”もしくは“検視官が主である州”のどちらかであるが、州によっては監察医と検視官の双方が郡ごとに区切られた1つの郡の活動を行っている州もある。監察医または検視官の必要要件も各州によって大きく異なっている。法医学病理学の専門医資格が必要な州もあれば、管轄区民の投票を経て監察医/検視官の任官が決められる州もある。

乳児死亡調査員は、調査を行う州での法医学体系、死亡調査法制度を知って理解しておかなければならない。州法によって、調査および解剖が必要な死亡のタイプが異なっているが、大半の州法ではSUID症例は監察医または検視官が調査すべきとしており、この種の死亡例においては解剖を義務付けている州もある。

しかし、乳児死亡調査員も、捜査機関とともに現場での目撃者面接の責任を負い、お互いに当該州で規定されている法律や規定に基づき、互いを尊重しあうべきである。目標は同じ“包括的で専門的な乳児死亡調査を行うこと”であるからである。

異文化間情報および通訳の必要性を見極める

面接開始前に、面接の有効性や正確性に影響するような文化のおよび言語的な配慮の必要性があるかどうかを見極めることは極めて重要である。面接を行う者と面接を受ける者の文化的背景が異なる場合、面接員は可能性のある文化間の衝突や生じうる誤解について知っておくことが必要である。さらに、文化によって、表出されるジェスチャーの意味づけや、感情表出方法、服喪の習慣、そして言語表現（質問に答える場合、直接的に答えるか、歪曲的に答えるか）が異なっている可能性があること；健康に関する認識や警察というものに対する認識が異なっている可能性があること；および男女の役割と異性との交際まつわる慎みに関する問題にも違いがある可能性があること、などを理解することが重要である。面接員は、その地域での面接の予定が当座なかったとしても、自身の担当する地域の人々の文化的な違いの有無について、情報を収集し学習しておくべきである。地元の人種的、民族的、文化のおよび言語的多様性のあるコミュニティと関わることが、このような異文化間知識を得るために極めて重要である。地元のコミュニティ機関または文化的仲介者と共同作業を行うことは重要なアプローチである。事前に面接に通訳者を必要とするかどうかを決定すること、そしてその場合、準備段階から通訳者と共同で作業を行うことも重要である。

入手可能であった事例情報の事前検証

面接を行う前に入手可能であった全ての事例の関連情報を検証すると、状況の全体図が得られるであろう。救急援助を要請した養育者の乳児への関わり方、最後に乳児をどのように置いたか、どのように乳児が死亡しているのを発見したかについての情報や、現場でどのような言葉が交わされたのか、という情報を事前に得て、批判的に検証しておくことは、面接の正否を左右する重要性を持つ場合がある。面接を行う前に正確な情報を得ることで、この作業は容易になるであろう。

面接計画を立てる

面接計画があれば、現場で効率よく時間を使うことができるであろう。事前の計画があれば、面接を受ける人に合わせて面接時間を調整したり、それぞれの面接にふさわしい場所を選択したりして、家族や養育者に配慮しつつ、死亡現場を保存することもできる。また計画をしておくことで、適切なフォローアップの機会というものも得やすくなる。

計画を立てる際には、誰に面接を行うか、彼/彼女らの役割は何か、そして彼/彼女らから得たい情報は何か、を決める必要がある。また面接を行うにふさわしい調査員も事前に決めておく。

面接の標準化

面接を標準化することによって、面接の有効性を検討することができるようになる。標準化された面接は、面接の有効性を高め、コミュニケーションの促進につながり、作業の流れを明確にし、情報評価を一貫性をもって確実に行うことができることにもつながる。

面接の導入の段階 (the entry phase) を実施する

注意：どの段階においても、死亡調査員が犯罪の可能性があると判断した場合は、面接を終了し、管轄地区のプロトコールに基づく尋問を開始しなければならない。

専門家らしい雰囲気を提供する

目撃者である可能性の高い人物には、誰であろうと肯定的かつ抑制の効いた態度で自己紹介することで、その後の全ての会話に、専門家らしい雰囲気を設定することができる。ただ、自分が誰であるか、なぜここにいるのか、どのように役に立ちたいと思っているかを話すだけでも、死亡調査員として計り知れない便益を得るものである。

死亡調査員は権威を保ち(感情を抑制し)、それでいて同時に同情心を持っていなければならない。面接員は権威を保たなければならないが、あまり優位性をひけらかしすぎると、目撃者に当局担当者は無神経で傲慢であると受け取らせることになりかねず、会話に際しての厚い障壁が生じてしまう。情報提供者には尊敬の念を持って接し、面接実施前から何らかの犯罪行為があると見なしてはならない。このような先入観は、会話のプロセスや結果に著しく影響を与える。通訳を使う場合は通訳者も紹介する。

目撃者を席に案内する

目撃者にどこが一番安心する場所かを尋ね、面接にふさわしい場所かどうかを吟味する。目撃者に部屋の該当場所に行くよう依頼(命令でなく)し、目撃者のすぐ後ろに立って導く。このようにすると、依頼しながら尊敬の念を表すことができ、しかし同時に面接員がその場を管理しているというメッセージを送ることもできる。

目撃者をできるだけくつろがせる

居心地がのよさそうな場所を選んでからも、必要に応じていつでも場所を移動できるようにしておく。目撃者に普段どこで過ごしているかを尋ね、なぜその場所が快適なのかを探る；例えば、その場所は普段テレビを見る場所なのか、寛ぐ場所なのか、運動をする場所なのか？快適な場所を選んだあとは、アイコンタクトに気をつける。SIDS関連の現場では、優位性を見せないことが重要である。“犯罪現場”ではなく“死亡場所”としての心情を表すようにする。

適切な語彙レベルを設定する

話の聞き手について知ることは、面接を成功させる上で極めて重要である。従って、適切な言語を話し、適切な語彙を使うことが大切である。まずは目撃者に基本的な話題を一般的に話してみる。そして様々なレベルを素早く吟味することで、その人物の教育程度が良くわかったり、認識力が証明されたりする。直接的に教育程度を尋ねることもできるが、このような質問はそこに焦点を当てて聞くのではなく、面接の中に織り込むようにする。

目撃者の感情的な反応に基づいて、彼が教育を受けていない、または言語能力が劣ると見なさないように注意する。このような現場では、危機的状況にあるために、支離滅裂な発言や口ごもりなどが見られることは珍しくないからである。

加えて、英語が目撃者の第一言語かどうかを判断することも重要である。もしそうでない場合は、面接課程に入る前から通訳者が必要な場合もある。英語の能力に欠けることが、教育程度が低いことを意味すると見なしてはならない。

ラポール（信頼関係）を築く

ラポールを培うには、まず、下記の事項が重要となる

1. 自分が誰であるかを明確にする。
2. 通訳者がいる場合は紹介し、面接の手順を説明する。
3. 面接を行う目的を、ごく簡潔に述べる。
4. 面接を受ける者に、面接を行う許可を要請する。
5. 面接を受ける者に関連する、予備知識を入手しておく。

面接のラポール構築段階では、面接の第一義的な主題は一時棚上げする。ラポール構築段階は多面的なもので、面接員と被面接者の間に安心感を築くためのものである。また、面接員にとっては、被面接者の認知レベル、記憶力、順応力、再構築能力、感情的になる引き金、真実の述べ方などを評価する機会にもなる。通訳者と共同で実施する場合は、この段階は面接の進行に合わせて調整し、必要な場合は変更を行う。

被害者の苦しい立場を認める

生き残った家族やその他の関係者が現在どのように感じているかを認識し、理解することは重要なことである。面接員は面接を受ける者の苦しい心情を認め、情報提供者を尊重しなければならない。死亡した子どもに言及する際には名前呼び、彼、彼女、彼に、彼女に、などのように代名詞使うことは避ける。

乳児や幼児の死亡現場調査においては、極端に疑っているそぶりを見せないように注意する。面接開始前に、家族や養育者が、死亡調査員が自分たちを非難していると感じた場合は、最初に不信感を見せたことで壁を作ったことになり、作業が一層困難になる。

書式やメモ帳の使用

面接で使用される書式やメモ帳の種類は、当局者とのやり取りにおいて、情報提供者の反応や姿勢を大きく左右する場合がある。通常裁判や警察当局を連想させる外見のものは使用を避ける。例えば、黄色いリーガルパッド（法律用箋）は弁護士や法廷を連想させやすいため使用しない（Schafer & Navarro, 2004, p. 9）。車には予備の特徴のないメモ帳数冊を備えておく。面接をうける者の気を散らせることになるため、これには情報を書き込み過ぎないように注意する。

面接の、出来事につき聞く段階（the event phase）を実行する

面接の出来事につき聞く段階は、導入の段階とは異なる。導入の段階の目的は情報提供者に安心感を持ってもらい、信頼を得ることであるが、出来事につき聞く段階の目的は、より詳細な情報の収集である。下記に示す3つの技法を用いて、質問を導かなければならない。

基本的調査質問技法

3つの主要な調査技法は、以下のとおりである。

- 積極的（アクティブ・リスニング）かつ受動的な傾聴（パッシブ・リスニング）
- 自由回答形式質問を用いる
- 中立的質問を行う

積極的傾聴（アクティブ・リスニング）：アクティブ・リスニングは、面接の際に最も有効な会話戦略である。面接を行う場合は、情報提供者が話している内容を積極的に傾聴することで、相手を気遣い、尊重しているというサインをはっきり示すことが重要である。2～3分ごとに発言を評価し、承認するために感想を述べるのが非常に重要である。例えば、乳児の母が、最後にいつ娘が息をしているところを見たかを述べたら、「わたしの理解が正しければ、サマンサが呼吸をしているところを最後に見たのは午前3時、あなたが最後に彼女の様子を見たときですね」などと言う。このようなフィードバックは、面接員が正しく情報を聞いたかを確認し、情報提供者に面接員がちゃんと聞いていることを納得させることができ、

それによって信頼を築くことができる。通訳を介する場合は、通訳の課程において情報の正確性が損なわれていないかどうか確認するために、このようなやり取りが占める割合が大きくなる場合がある。

受動的傾聴(パッシブ・リスニング)：パッシブ・リスニングは特にフィードバックを必要としない。面接員がパッシブ・リスニングを行うのは、通常、気持ちが焦っている場合、発言内容に関心がない場合、または経験が浅い場合である。場合によっては、パッシブ・リスニングは否定的なものではないと考えられる場面もある。身振りを使用するのもアクティブ・リスニングのもう一つの方法で、はい・いいえ式の質問や、基本情報の収集時に利用することができる。

自由回答式質問：どの面接でも、死亡調査員が長々と話をしたり、目撃者と議論を始めたりしてはならない。自分が体験した状況とそれに対する自分の反応を、目撃者に説明するよう依頼すれば、調査員はより完全な情報を得ることができ、解消すべき矛盾点を明らかにすることができる。自由回答式の質問をすると、情報の自由な流れが生まれ、アクティブ・リスニングの良い機会となり、目撃者に信頼と敬意を表すこともできる。

中立的質問：面接の雰囲気は、出される質問によって決定づけられる。死亡現場での調査では、死亡調査員は慎重に言葉遣いを選択することが肝要で、必ず中立的であるようにする。以下のリストは批判的質問と適切な質問の違いをわかりやすく示したものである。それぞれの適切な質問の目的は、アクティブ・リスニングと共感の気持ちを示し、信用、敬意、そして信頼を築くことである。

批判的質問：

- ・ 赤ちゃんに平手打ちしましたか？
- ・ 赤ちゃんを落っことしましたか？
- ・ 赤ちゃんの様子を見ないのですか？
- ・ 赤ちゃんが病気でなかったというのは確かですか？
- ・ なぜ息子さんを病院に連れて行かなかったのですか？
- ・ CPRをしなかったのですか？
- ・ 何かしませんでしたか？

適切な質問：

- ・ Amyはけがをしていましたか？
- ・ 最後に確認したとき、ジョンの様子はいかがでしたか？
- ・ ボビーの様子でどこか変わったところに気づきませんでしたか？
- ・ マイクは最近医者にかかっていたか？
- ・ エリーを見つけたとき、あなたはどうしましたか？

目撃者に話をさせ、辛抱強く聞くようにする。このような場面では、様々な感情や反応が渦巻いている罪のない目撃者が、実際に面接官に述べているのとは違うふうに誤解されることがよくあるからである。

目撃者から情報を収集する

下記のヒントが、目撃者からの情報収集に役立つ場合がある：

- ・ 子どもを名前で呼び、家族の同意があれば愛称を確認する。
- ・ 同情の気持ちを示す。
- ・ 中立的な態度で質問する。
- ・ 敵対的になったり怒ったりしない。
- ・ 冷静で指導的な声で話す。
- ・ 指示は明確にし、質問には答える。
- ・ 養育者からの治療や搬送の質問に対して、説明をする。
- ・ 必要に応じて発言を繰り返す。
- ・ 状況が許せば、養育者が赤ん坊と同室することを許可する。
- ・ チェックリストに沿って質問をすることは避ける。質問は必ずしも書類上の順番どおりに行わなくて良い。

- ・ 状況が許せば、養育者が赤ん坊と同室することを許可する。
- ・ チェックリストに沿って質問をすることは避ける。質問は必ずしも書類上の順番どおりに行わなくて良い。

誘導的会話の基本

目撃者には自分の言葉で話をさせなければならないが、必要な情報を得るために、時には会話を導いていくことが必要なこともある。SUIDI報告書式や、管轄区で承認されている同種の報告書式では、会話を系統的で包括的なものとするために、設定された質問項目がある。しかし、書式の内容にとらわれないように注意する必要がある。非常に経験豊富な面接員でも、書式の正確な言葉に頼り、自然な会話に溶け込ませることができない場合もある。書式自体に頼りすぎると、面接の導入の段階で信頼関係を築けないリスクを負う。書式は参考として用い、定期的に書式の質問を、会話形式でどのように行うかを練習すると良い。

面接中の情報を記録する

データの収集と情報の記録は、面接の基本的な目的である。自分の記載した書類が、威嚇的に見えたり、あるいは法律事務所や司法機関と非常に近い関係であるように見えたりしないように注意する。情報提供者の気持ちをそらすような、目立つロゴや文字を抜いて印刷された書式を使うことが最適である。書類を使用し始める際には、目撃者になにか感情的なことや個人的なことを尋ねる際ではなく、特定の情報を得る必要があるときのみ参考にする。乳児や幼児の死亡が絡む事件では、調査中に気遣いや共感の気持ちを強調することが重要である。常識を保ち、面接を通じてできるだけ誠実に見えるように努める。

面接の、現場から離れた経緯につき聞く段階 (the escape phase) を実施する

結果はどうあれ、情報提供者または目撃者から情報を収集しつくした段階が訪れる。この時点で目撃者は面接が終了すること、または現場から離れた経緯につき聞く段階に入ることを期待し始める。

最後の質問をする

最後の質問をすることによって、面接が正式に終了するという明確なメッセージを送ることになる。最後の質問は面接を要約し、肯定的な言葉で終了させる。これによって目撃者には肯定的な感情が残り、そうすることで、その後の接触もしやすくなる。目撃者の言葉で出来事を振り返るように求めても良いが、過剰な反復は避けるようにする。

面接の終了時に被面接者に下記の2つの質問をすることは常に有益である：

- ・ この出来事に関して私が知らないようなことで、これは知っておいたほうが良いとあなたが思うことが他に何かありますか？
- ・ あなたにまだお尋ねしていないことで、私がお聞きしたほうが良い質問をなにか思いつきますか？

この2つの質問によって新たな情報が引き出されることがよくある。またこの質問は、面接において、自分が重要な役割を果たしていたのだと相手に感じさせることができる。また、あとで不利な証拠が発見された際に、自分の発言を修正する機会を減らすことにもなる。

目撃者に感謝を述べる

面接を簡素な謝辞で締めくくることが重要である。単にこのように述べる。「時間を割いて情報を提供していただき、ありがとうございました；我々はジョニー君が亡くなった理由を解明するために最善を尽くします。あなたもご家族もさぞお辛かったですよ」。

礼を述べる際は、決して目撃者を見下ろさないようにする。常に同じ目線でアイコンタクトを保つ。目撃者が着席し、あなたが立たねばならない場合は、その人物が感情的にあまりにも疲弊して立てないか、ショックや不信から動けずにいるかもしれないことを尊重し、目撃者の視線の位置まで膝を曲げる。

もう戻って来る気持ちがないように見えないよう、謝辞があまりにもこれっきりという響きにならないようにする。また、直後の現場にいる場合は、その後に必要に応じて面接やフォローアップがあることを協調する。実務的ではなく励ますような発言になるよう努める。

面接は励ますような言葉で締めくくり、今後も連絡を取ることを促し、同情の意思と、家族のために職務上できる限りのことをやるという意味を示す。場合によっては、解剖の最終結果を得たい旨を説明する。(全ての州と管轄区で乳児および幼児に解剖が義務づけられているわけではない)。面接の進行や結果について個人的にどう感じていても、微笑んで快活に、情報提供者に面接はうまくいったことを示す。希望を示すことは必ずしもあなたが家族の問題を解決することができ、すべての疑問に答えられることを意味するわけではない。肯定的ではあっても非現実的にはならず、決して偽りの希望に導かないようにする。

将来の接触の機会を提供する

最初の訪問後、その後の接触の計画を立てる。目撃者に再度、将来も接触があることを話し、目撃者が接触を恐れるのではなく、再び音信があることで勇気づけられるよう、支援的で同情的な言葉でそれをあらわすようにする。

過去にフォローアップが役立った家族の話があれば、それを伝える。地元の支援機関などについて話すのも良い。非常に複雑な死亡現場調査に関わっている場合は、目撃者に支援について言及する際には注意を払うようにする。複雑な事件の場合は、一般的な言い方で支援機関を探すことを告げるにとどめ、特定の組織や団体の名前を挙げないようにする。

退出

退出は面接の最終段階であり、適切で生産的に面接を締めくくるものである。この段階は、相手に例を述べ、出口に向かう段階である。自分の車の周りに家族を呼び寄せ(死亡形態によって異なるが)、目撃者を一人残しても感情的に安定しているか、誰かがそばについていた方がいいかを判断する段階でもある。出口に向かって歩きながら、面接後の目撃者の気持ちや感情の状態について言葉を交わす。感情の洪水や精神科領域でいう“ドアノブ効果(自分にとって大切な話題であればあるほど、最後の一言でしか表現できないこと)”に気をつける。同日に困難な状況にいた目撃者が、退出しようとした途端、様々な感情や思考を表現するという場面に出会うことはよくあることである。この反応を策略と誤解したり、その人物が嘘をついていたと思ったりしてはならない。通訳を介する場合は、面接のこの段階でどのように振舞うかを計画しておく。

問題となりうる事柄

面接の過程には4つのタイプの問題が生じる可能性がある。面接の短縮化、正確に情報を記録するうえでのミス(被面接者の発言などを記録しそびれる)、情報の誤評価または誤解釈、そして通訳利用の難しさである。

面接の短縮化

この問題は、面接員が面接を早く終えすぎるものである。状況を悪化させるものには、例えば(1) 質問対象の人物の理解力に問題がある(精神疾患、中毒、外国語など); (2) 調査員の疲労; および(3) 調査員が既に別の情報源から情報を得ているため、面接を継続する必要がないとみなしていることなどがある。

正確に情報を記録するうえでのミス

この懸念をひきおこす大きな問題は、ずさんなノート記帳、またはちゃんと機能しないテープレコーダーの使用である。